

甲状腺外科草子 18

黒髪の魔力：万葉から近代まで

杉野 圭三

最近、街中ではくすんだ茶髪を見かけることが多く、黒髪は希少となっているが、万葉の時代では女性美評価の大きな要素は黒髪であり、歌にも数多く詠まれてきた。

朝寝髪われは梳(けづ)らじ 愛(うつく)しき 君が手枕 触れてしものを

(万葉集 2578, 作者不詳) 訳：不要

ぬばたまの 我が黒髪を引きぬらし 乱れてなほも 恋ひ渡るかも

(万葉集 2610, 作者不詳) 訳：不要

ぬばたまの黒髪濡れて 沫(あわ)雪の降るにや来ます 幾許(ここだ)恋ふれば

(万葉集 3805, 作者不詳)

訳：沫雪が降る時に訪ねて下さるのだろうか、私がこんなに恋しいのだから。あの降りしきる沫雪のようにしげく訪れてほしい。

新婚早々、夫は任地に赴き残されたむすめは悲傷のあまり病床に臥した。年経て帰った夫はやつれた娘に驚き歌を作り、その返歌とされる。



左：檜扇(ひおうぎ)の花、右：その種子(ぬばたま)

「ぬばたま」は檜扇(ひおうぎ)の実であり、その黒光りする様より、黒髪の枕詞とされる。これらの句の出来栄えから、教養のある人の歌と推察されるが、率直で大胆な恋の歌であり、敢えて名を伏せたのかもしれない。

恋多き女性、和泉式部は「和泉式部日記」や百人一首の56番：「あらざらむこの世のほかの思ひ出に今ひとたびのあふこともがな」で知られるが、「黒髪」で有名な歌がある。

黒髪の 乱れも知らず うち臥せば まづかきやりし 人ぞ恋ひしき (後拾遺和歌集)

この歌を本歌とした藤原定家の歌。

かきやりし その黒髪の 筋(すぢ)ごとに うち臥すほどは 面影ぞたつ (新古今和歌集)
万葉、平安時代の人々の素直で官能的表現の歌である。



左：和泉式部(978頃—不詳)、中：藤原定家(1162—1241)、右：待賢門院堀河(生没年不詳)

待賢門院堀河の歌は少し趣が異なる。

長からむ 心も知らず 黒髪の 乱れて今朝は ものをこそ思へ (百人一首80番)

恋の終わりを予感させる物憂い歌である。近代に目を向ければ、与謝野晶子の「みだれ髪」にも黒髪を主題とした有名な歌がある。その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな
黒髪の千すぢの髪のみだれ髪かつおもひみだれおもひみだるる

古今東西、女性の髪にはメデューサの様に力が宿ると言われ、徒然草にも記述がある。『女は髪のでたからんこそ、人の目立つべかめれ(中略)、然れば女の髪筋を縫れる綱には大象も良く繋がれ、(中略)』(徒然草第9段)。

兼好が黒髪に繋がれたとは思えないが、最近には家に帰り、「たいぞう(大象)さえ繋がれる黒髪ならば、けいぞう(圭三)が繋がれるのもむべなるかな」と思うこの頃である。

肖像は菱川師宣画(国立国会図書館蔵)を中心に掲載。

参考文献

中西進. 万葉の秀歌. ちくま学芸文庫

万葉集. ビギナーズクラシックス. 角川ソフィア文庫、

兼好. 徒然草. 島内裕子校訂・訳. ちくま学芸文庫

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2022年2月16日